

干潟の危機は、自然の危機

ひがた



オグロシギの群れ

オオアシシギの群れ

日本の半分以上が人工海岸

先月、発表された「自然環境保全基礎調査(環境庁)」で、日本本土の自然海岸は、高度成長にともなう埋め立てや、干拓、港湾、防潮堤などの建設によって、50%を下まわったということがわかりました。

自然海岸の多いベスト4は、岩手87%、島根82%強、鹿児島80%弱、沖縄78%強。反対にワースト4は大阪2%弱、愛知9%弱、富山14%強、神奈川県21%強の順です。ちなみに東京は、伊豆七島や小笠原諸島を入れれば74%弱ですが、都区部だけだとゼロ。東京湾全体では、神奈川や千葉につながる海岸線を入れてやっと10%の自然が残されていることになります。

海岸線の自然がいかに失われたかを示すきびしい例：それは干潟の減少です。東京湾では、昭和30

自然が生んだ文化的財産・干潟

潮の満ち干の差が大きな、内湾の河口にできる遠浅：干潟は、こまかい泥と豊富な有機物の働きで海水をきれいにする、いわば天然の浄水場であり、そこで見られるないたくさん生物が、お互いに深くかかわり合って生活しているところです。野鳥に例をとれば、夏、シベリアやアラスカで繁殖し、冬は東南アジアや遠くオーストラリアまで飛んで行くシギ、チドリにとって、生命と種の存続をかけて彼らの祖先がずっとそうしてきたように、干潟は休息と栄養補給の大切な中継基地なのです。

こうした貴重な干潟が開発失われたところは、シギやチドリ類の渡米数が減り、海水汚染が問題となり、すでにいくつかの海が死に、いくつかの海に死の危機が……。

いったん失った自然をとりもどすのは容易なことではありません。人間は、それを失ったあとでかけがえのない価値に気づく、というおろかな行為を歴史の中で何度もくりかえし、ここでもまた、くりかえそうというのでしょうか。

私たちはいま、残された自然をより良い状態で保存していく努力をすべきです。同時に、破壊した自然はできる限り復元しなければなりません。同時に、破壊した自然が持つ必要性を痛感します。日本の自然は、それだけでりっぱな文化的財産です。人間がつくったものだけが文化的だとするおごりは、捨てなければなりません。日本の干潟は危機にあります。当然、そこに依存しているトリやいろいろな生きものも、です。私たちが、彼らを、そして日本の自然を、文化的財産として次の世代へ引き継ぐ責任があります。



日本の保護区

財団法人日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この広告は、日本鳥類保護連盟の指導を得て、サントリーがシリーズとして制作し、原則として毎月第三日曜日に掲載いたします。

トリからのメッセージ 87

●愛鳥保護をわねします

サンコウチョウ、シジュウカラ、オオアシシギ、イサナのカラーイラスト入り便箋24枚つづり(タテ25.5×ヨコ18cm・横書き用)です。ご希望の方は1冊300円・平300円(2冊600円・平600円)分を切手で、品名「愛鳥便箋」とお書きのうえ、お申込みください。

発売：平成13年4月 東京都日本橋区日本橋三丁目3番1号 サントリー株式会社 愛鳥キャンペーン係

●「愛鳥カルタ」の入選と佳作がきました

ことし4月の本報で募集した「愛鳥カルタ」は、6月末の締切りまでに寄せられた力作が4,873通。ほんとうにありがとうございました。選考の結果、入選ならびに佳作となりました方には、直接ご連絡いたします。

作品発表は11月(16日予定)の本報で、また、カルタの出来あがりは11月末ごろとなります。どうぞお楽しみに。

●トリとヒト、本たち。愛鳥キャンペーンは同じ自然の員として人間の義務だと思います。

自然保護。それは、ヒト自身の生存を考え、生命への愛情をはぐくみ、次世代へ美しい地球をのこすことです。私たちがこの新聞広告や、各地のバードサンクチュアリづくりやいろいろな制作物を通じて展開している愛鳥キャンペーンも、自然保護の精神を原点においています。

トリの生命をまもることがヒト自身を守ることにあり、かけがえのない自然を、もうこれ以上こわすに譲り育てようという社会環境づくりを目ざしています。一九九九年目 私たちはこれから、野鳥や自然の保護に関するいろいろな問題に取り組みをまいります。ヒトの心にトリの保護区を……よりよい自然環境づくり運動を……皆さまの理解とご支援をお願いいたします。